

平成26年度 学校評価報告書【国立市国立第五小学校】

学校教育目標		○学びあう子(本年度重点目標) 助けあう子 きたえあう子			重点目標	○学びあう子				
学校教育目標	中期的目標	短期的目標	具体的な方策	評価指標		達成状況		分析	改善策	学校関係者評価
				中間評価	最終評価	中間評価	最終評価			
学びあう子 「確かな学力の向上(本年度重点目標)」	○基礎的な知識および技能の定着 ○身に付けた知識及び技能を活用する力の育成	①正しい鉛筆の持ち方を身に付けた児童を育成する。 ②学年配当の漢字の読み書きができる児童を育成する。 ③基本的な計算の仕方を身に付けた児童を育成する。 ④問題解決に対する見通しをもち、根拠を立てて仮説を記述できる児童を育成する(3, 4年) 問題の解決を図り、学んだことを振り返り考察を記述できる児童を育成する(5, 6年)	①毎月1日は「えんぴつの日」とし、「OKマークをくるとまわしてなかゆびまくら」を全学級で確認させ、意識の向上を図る。 ②ベーシックドリル等を活用しながら、前学年までに配当されている漢字の読み書き練習をさせる。 漢字の読み・筆順・熟語の確認・繰り返し書き取り練習を毎日取り入れ継続する。	4 身に付いた児童が80%以上 3 身に付いた児童が70%以上80%未満 2 身に付いた児童が60%以上70%未満 1 身に付いた児童が60%未満	1 (30.4%)	1 (49.1%)	学校全体として、十分な定着が図られているとは言えない状況にある。毎月1日に働きかけたり、補助具を貸し出したりが、正しい形を理解できない児童や意欲が持続しない児童も見受けられる。また、定着に時間を要する技能であるので、継続した指導が必要である。	・授業の中で、学級担任や専科教諭が鉛筆の持ち方について積極的に声をかけ、指導する。 ・校内に「鉛筆の正しくない持ち方を改善するためのヒント」を掲示する。	・鉛筆の持ち方は、手だけでなく姿勢や力の入れ方なども指導するとよい。年齢を重ねるにつれ、伸びるものだろう。	
			③ベーシックドリル等を活用しながら、前学年までに既習の基礎的基本的な学習内容を反復練習させる。	4 90%以上の児童が平均90点以上 3 80%以上90%未満の児童が平均90点以上 2 70%以上の児童80%未満が平均90点以上 1 90点以上の児童は70%未満	2 (79.7%)	3 (88.5%)	前年度までに習得している内容であるが、一般的に誤答率が高い漢字は、多くの児童が間違えている。反復練習と身に付けるための方法を指導することが必要である。	・対象学年のベーシックドリルを全て一度は取り組ませる。 ・時間や方法など取り組ませ方は学級で工夫をし、効率的に全員が反復練習ができるようにする。(例えば、授業の始まりの5分間で毎回テスト、すき間時間に書き取り、宿題にするなど)	・平均値よりも具体的な数値を出して、何点台に何%の児童がいるのか(正答数分布)を示す必要がある。	
			④仮説 ①文型(話型)を用いて表現させる ②記述の観点を与える。これにより、学んだことを活用し思考力・判断力・表現力を高めさせる。 ○考察 ①記述の観点を与える ②記述した文章を友達と交流させる これにより、学んだことを振り返り思考力・判断力・表現力を高めさせる。	4 80%以上の児童が達成 3 75%以上80%未満の児童が達成 2 70%以上75%未満の児童が達成 1 達成した児童が70%未満	①2 (71.0%) ②1 (32.0%)	①1 (83.8%) ②1 (44.0%)	①3年生児童にとって問題解決型の学習展開が始まったばかりであり、今後問題解決の経験を重ねることさらに仮説の記述内容を高めることができる。②高学年児童は振り返りをする態度の定着はできているが、記述の視点を複数もつことは課題が見られた。さらに内容を高める手立てを必要としている。	①・客観的な根拠のある仮説を書かせるために、「仮説の書かせ方(話型)」を活用する。 ・問題解決型の学習指導を繰り返す。 ②・考察を記述させる際には、必ず2つ以上の視点を提示して記述させる。 ・複数の視点を踏まえながら記述することや友達の考察内容を参考にすることを指導する。	・平均値よりも具体的な数値を出して、何点台に何%の児童がいるのか(正答数分布)を示す必要がある。	
			⑤自尊感情アンケートの結果を活用し、個々に合った自信の持たせ方を教職員で共有できるようにする。 ⑥保護者との面談等を通し、保護者と連絡を密にし、児童の良い所を伝え合えるようにする。 ⑦児童が表現したもの(文章・発表・作品等)を交流し合う場を設け、互いのよさを伝え合えるようにする。 ⑧学期に1回は道徳などで、自尊感情・自己肯定感を高める授業を行う。	4 A自己評価・自己受容の平均値が3.5以上 3 A自己評価・自己受容の平均値が3.2以上 2 A自己評価・自己受容の平均値が2.9以上 1 A自己評価・自己受容の平均値が2.9未満	2 (3.18)	2 (3.02)	学年が上がるほど、自己評価・自己受容の平均値が下がる傾向が見られる。また、昨年度自己肯定感が低い児童は今年度も低い傾向が見られる。	・左記の具体的な方策をさらに徹底し、児童が安心して学べる場を作ることや小さなことでも認め褒める指導の継続を図る。 ・アンケート結果を全職員で共有し、結果が低かった児童については、自信がもてるように全教職員で指導に取り組む。	・自己肯定感の低い児童がどう上がっていくか期待したい。 ・スクールカウンセラーの有効な使い方ができるとよい。	
助けあう子 「豊かな心の育成」	○自己肯定感をもち、他人も大切にできる児童の育成 ○社会の一員であるという自覚と規範意識をもった児童の育成	⑤自己肯定感の高い児童を育成する。 ⑥◇すれ違った先生や外部の方に、適切な(明確な声・一度あいさつした人には黙礼など)挨拶ができる児童を育成する。 ⑦◇仲間外れや相手の嫌がる言葉遣いなどのいじめをしない児童を育成する	4 90%以上の児童が身に付けている 3 80%以上90%未満の児童が身に付けている 2 70%以上80%未満の児童が身に付けている 1 身に付けている児童が70%未満	3 (87.1%)	3 (86.6%)	適切なあいさつをしようという意識は比較的高い傾向が見られるが、実際に明確な声を出したり来校者にも進んで挨拶したりする態度の育成をさらに伸ばす必要がある。	・来校者や外部の方にあいさつをする機会となる行事には、聞き手が気持ち良くなるような主体的なあいさつの必要について、再度指導する。 ・「あいさつ標語」「クラスあいさつ宣言」を作成させ、目標の設定とその振り返りを徹底させる。	・あいさつは自然と出るものとして育ててほしい。		
		○毎学期1回「いじめアンケート」を実施し、予防策・早期発見に努める。 ○人権月間に、ビデオ・DVD教材を活用し、自分や○の命を大切にしようとする気持ちを育む。 ・5年生とスクールカウンセラーの給食交流を行い、相談しやすい環境を整える。	4 100%の児童が、仲間外れをしたり、嫌がらせをしたりしない。 3 95%以上の100%未満の児童が、仲間外れをしたり、嫌がらせをしたりしない。 2 90%以上95%未満の児童が、仲間外れをしたり、嫌がらせをしたりしない。 1 嫌がらせや仲間外れをしない児童が90%未満	1 (89.4%)	2 (91.7%)	いじめに関する調査を毎学期実施し、検討を必要とする案件には、即対応してきたが、目標とする4(100%)と中間評価には開きがある。児童の思いやりの心情や命を大切にしている態度の育成の継続・徹底が求められる。	・いじめに関する調査の結果を精査し、児童の小さな訴えでも丁寧な聞き取りをする。その上で、より適切な対応を検討し全職員で解決を図る。 ・12月の人権月間には、道徳の時間を中心に、自分や他の命を大切にしようとする気持ちを育む。			
		○隔週水曜日の中休みに「パワーアップタイム」を設定し、クラスごとに体力向上を図るための運動に順次取り組ませる。 ○体育委員会による「パワーアップイベント」を開催し、体力向上を図った運動を、ゲーム感覚で楽しみながら行う。 ○教室にハンドグリップなどの簡単な器具を置き、握力や手首の強化を児童に促す。	4 都平均と同じか、上回る種目が75%以上 3 都平均と同じか、上回る種目が60%以上75%未満 2 都平均と同じか、上回る種目が50%以上60%未満 1 都平均と同じか、上回る種目が50%以下	3 (71.8%)		これまでの体力向上プランの継続を通して前年・全前年よりも向上が見られている。しかし、握力や立ち幅跳び、長座体前屈など、全体的に都平均を下回っている種目は変わらないう。今後も児童が楽しく運動をする手立てを通して、これらの課題解決を図る必要がある。	・各学級で、休み時間を利用したクラス遊びを1週間に1度は実施する。 ・握力を向上させるために、教室や校内に用意したハンドクリップなどの器具を使うことを児童に促す。 ・体育授業に立位体前屈を必ず取り入れ、柔軟性を養う。 ・クラス遊びに「鬼ごっこ」など走る運動を積極的に取り入れる。	・体力テストを東京都の平均値と比較するだけでなく、平均値との差が大きく開きのあるものに目を向けて分析するべきである。 ・握力が低い原因をさらに詳しく調べる必要があるだろう。他校との比較もするとよい。 ・握力はどんな時に使うものであるかを、児童に教える必要があるだろう。 ・昔は雑巾絞りがしつかりできた。生活に密着した感じで握力を上げられるとよい。		
○基礎的な体力の向上 ○心身の健康づくりに努力する児童の育成	⑧基礎的な体力の向上に努める児童を育成する。 ⑨◇自分の体や健康について意識し、健康な生活を送る努力をする児童を育成する。	4 「早寝早起き朝ご飯朝うんち」がほぼ(週4日以上)できていると答える児童が90%以上 3 「早寝早起き朝ご飯朝うんち」がほぼ(週4日以上)できていると答える児童が85%以上90%未満 2 「早寝早起き朝ご飯朝うんち」がほぼ(週4日以上)できていると答える児童が80%以上85%未満 1 「早寝早起き朝ご飯朝うんち」がほぼ(週4日以上)できていると答える児童が70%以上80%未満	1 (66.6%)	1 (56.5%)	今年度は4つの目標のうち、自力で解決を図りやすい「早寝」に重点を置いている。調査から高学年ほど「早寝」をしていないと答える児童が多い傾向が見られた。その理由には、テレビやゲームなど趣味の時間であったり、勉強をする時間であったりした。保護者への啓発と児童の意識の高まりを目指す。	・早寝頑張りカードを作り、早寝ができたなら○をして、保護者のサインをもらう活動を一週間継続する。 ・保健委員会が睡眠についてアンケートを実施し、その結果を踏まえて保健集会を行い児童の意識を高める。	・「朝うんち」の調査から、食生活や体質などの問題も見えてくるので、保護者へフィードバックしてもいいと思う。 ・寝る時間の遅い子には、生活や気持ちの安定なども気を付けてほしい。			
		○校長講話で、食についての話をし、残菜減量についての意識啓発をする。 ○適宜残菜量の実態について児童に伝え、残菜減量についての意識啓発をする。 ○食育月間で、発達段階に応じた食育指導を行う。	4 平均より1%以上残菜(おかず)の多い日が月の三分の一以下の月が6か月以上 3 平均より1%以上残菜(おかず)の多い日が月の三分の一以下の月が4か月～5か月 2 平均より1%以上残菜(おかず)の多い日が月の三分の一以下の月が3か月 1 平均より1%以上残菜(おかず)の多い日が月の三分の一以下の月が2か月以下	1 (0.0%)	1 (0.0%)	本校の残菜の量は多い。食への意識の啓発や知識を身に付ける指導は、様々な機会に実施しているが、十分な効果は上がっていない。今後、指導の工夫はもちろん、保護者や給食センターとも協力しながら手立ての検討を必要と考える。	・各学級で食べる時間を長く確保するために、給食準備を短時間でさせ、12:30までには「いただきます」をさせる。	・残菜が多いので、時間と食べる量との関係も考えてほしい。日本全体の残菜の多さも児童に知ってほしい。		

達成状況の指標 A: % ~ % B: % ~ % C: % ~ %